

[成果情報名] イチゴ「恋みのり」の炭疽病および萎黄病の発病特性

[要約] イチゴ「恋みのり」は、炭疽病に対して発病程度はやや低いものの「ゆめのか」や「さちのか」と同等に罹病する。また、萎黄病に対しては「ゆめのか」と同等かやや強く、「さちのか」より強い。

[キーワード] イチゴ、恋みのり、炭疽病、萎黄病

[担当] 長崎県農林技術開発センター・環境研究部門・病害虫研究室

[連絡先] (代表) 0957-26-3330

[区分] 施設野菜

[分類] 普及

[作成年度] 2022 年度

[背景・ねらい]

イチゴ「恋みのり」は、連続出蓄性に優れる点や摘花作業が少ない等の特性から本県において栽培面積が増加している品種である。「恋みのり」の各種病害に対する発病特性は、うどんこ病および輪斑病で明らかになっており（長崎県研究成果情報、2019）、炭疽病および萎黄病については育種機関による調査で罹病しやすいとされているものの知見が少ない。そこで、「恋みのり」の炭疽病および萎黄病に対する発病特性を既存品種である「ゆめのか」や「さちのか」と比較しながら明らかにし、防除対策に資する。

[成果の内容・特徴]

- 「恋みのり」は、炭疽病に対して「ゆめのか」および「さちのか」と同等に感染・発病するが、病勢の進展がやや遅い傾向にあり、萎凋枯死する株が少ない（図1、図2、写真1）。
- 「恋みのり」は、萎黄病の発病株率、発病度ともに「ゆめのか」と同等かやや低く、「さちのか」より低い（図3）。

[成果の活用面・留意点]

- 「恋みのり」は炭疽病および萎黄病に対して発病程度はやや低いものの罹病性であるため、「ゆめのか」や「さちのか」と同等の防除対策が必要である。
- 「恋みのり」は肥料切れにより芽なし株（心止まり株）が発生しやすくなるが、窒素肥料の過度な施用は炭疽病の発生を助長するおそれがあるため、施肥管理は適正に行うよう留意する。
- 本試験は接種による試験であり、殺菌剤は使用していない。
- 本試験に用いた炭疽病菌は *Colletotrichum gloeosporioides* である。

○試験方法

| | 炭疽病 | 萎黄病 |
|---------|---|---|
| 場所 | センター内ビニルハウス | センター内ガラス室 |
| 区制 | 1区12株（9cmポット苗）×3反復 | 1区20株（9cmポット苗）×3反復 |
| 病原菌接種日 | 2021年8月5日 | 2022年8月30日 |
| 接種法 | 分生孢子懸濁液（濃度：約 4.3×10^4 個/mL） 噴霧による直接接種 | 分生孢子懸濁液（濃度：約 2.8×10^6 個/mL） 灌注による直接接種 |
| 指数別調査基準 | A：全身的な萎凋、枯死 B：上位3複葉および葉柄に21個以上の病斑がある、 または葉柄が2本以上折損している C：上位3複葉および葉柄に5～20個の病斑がある、 または葉柄が1本折損している D：上位3複葉および葉柄に5個以下の病斑がある E：発病を認めない | A：枯死 B：株の萎縮・萎凋 C：小葉の奇形、黄化など典型的病徴 D：小葉のわずかな奇形・黄化 E：発病を認めない |

$$\text{発病度} = \frac{(4A + 3B + 2C + D)}{4 \times \text{調査株数}} \times 100$$

[具体的データ]

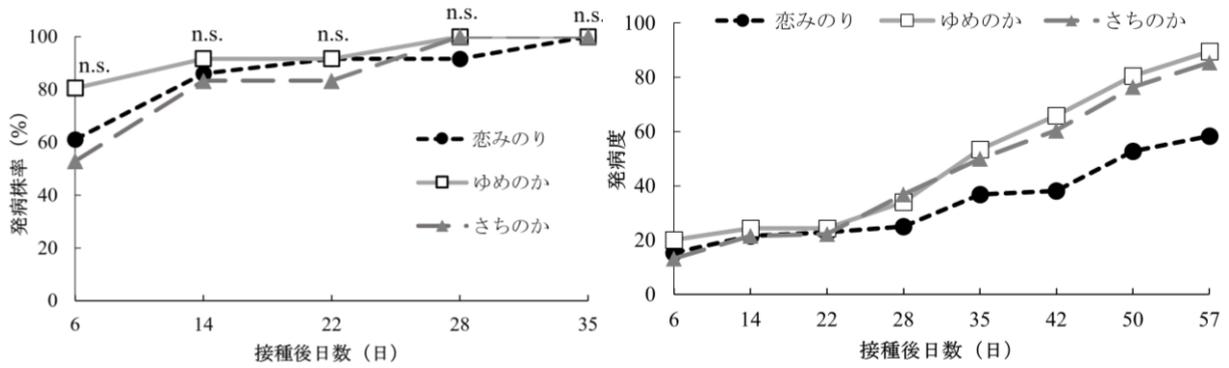


図1 炭疽病の発病推移

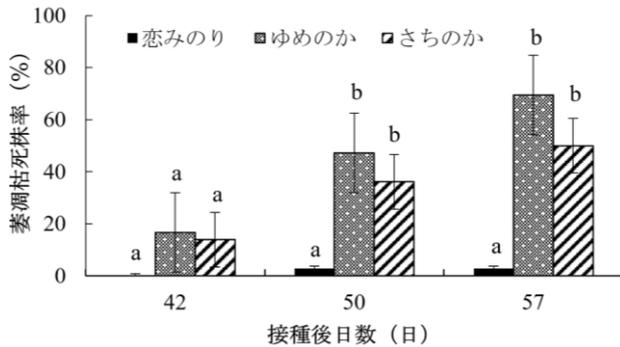


図2 炭疽病による萎凋枯死株率の推移 写真1 炭疽病菌接種57日後の発病程度の違い (左: ゆめのか、右: 恋みのり)

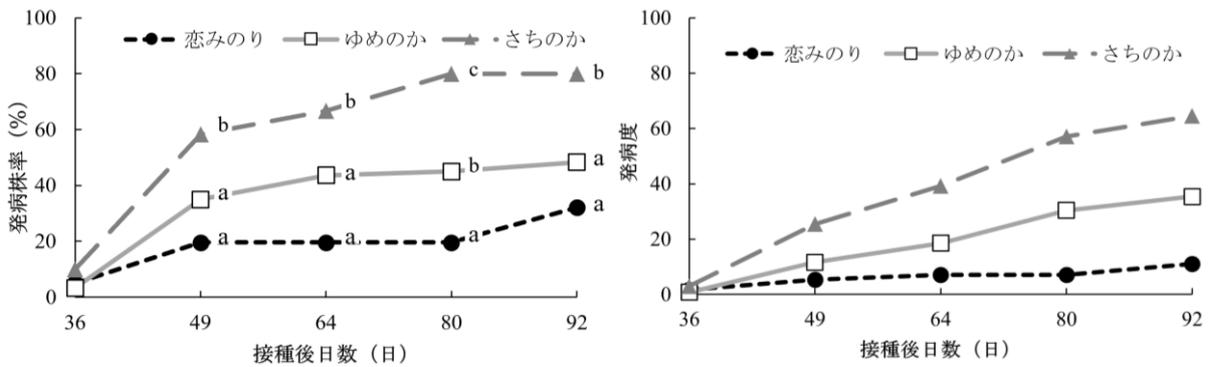


図3 萎黄病の発病推移

注) 図1～3

- ・ 図中の同一調査日の異なる文字間には Tukey の多重検定 (5%水準) で有意差あり、n.s.は有意差なし
- ・ 図中のエラーバーは標準誤差

[その他]

研究課題名：農林業生産現場への緊急技術支援プロジェクト研究
 予算区分：県単
 研究期間：2021～2022 年度
 研究担当者：柳井瑞帆